

地球観測将来構想小委員会（第25期第3回会合）議事要旨

日時：2021年10月11日(月) 13:00-15:00

場所：オンライン（zoom）開催

出席委員：沖大幹、佐藤薫、高薮縁、中島映至、中村尚、福田洋一、古屋正人、村山泰啓、今村剛、岩崎晃、江淵直人、岡本幸三、岡本創、沖理子、笠井康子、金谷有剛、小池真、重尚一、祖父江真一、高橋暢宏、中島孝、中島英彰、早坂忠裕、林田佐智子、樋口篤志、松本淳、横田達也（27名）

欠席委員：藤井良一、榎本浩之、佐藤正樹、本多嘉明、（4名）

（以上敬称略、名簿順）

1. 議事要旨の取り扱いについては、幹事会に一任するということが承認された。
2. 目次案の確認を行い提言の方向性と章立てについて議論した。
 - 沖大幹委員より、現在、学術会議において提言などの在り方についての議論があることが紹介された。
 - 上の紹介を踏まえて議論した結果、もともとそのつもりであるが、決して狭いコミュニティからの我田引水の見解ではなく日本全体の科学の推進という視点を意識した議論のもとで提言発出を目指す方向で進めることで一致した。
 - この点を第三部での「意見の表出等」の資料に基づき確認した。田近委員長に相談することとなった。
3. 3章から5章の執筆方針の議論を行った
 - 3章 地球衛星観測の優位性
 - (1) 科学的発見の可能性の拡大と波及効果資料に基づき執筆方針説明
内容は、最近の進展。IPCC AR6。化学データ。ひまわり。雲・降水。海洋。地殻変動。
差分の時間スケールについての意見、「こうすべき」を書くべきではないかという意見、地球観測の可能性と性能向上による新しい可能性を紹介すればよいのではという意見。社会との関連については、エビデンスとして実例を出すのがよいという意見、データの「オープンフリーポリシー」を強調すべきという意見があり、議論が行われた。
 - (2) 災害対応について執筆方針の説明
 - (3) 気候予報・環境モニタリングにおける同化利用について執筆方針の説明
降水と水文を繋げるところの記載の必要性が指摘、水文モデルも取り込むことで社会に繋がるという意見、などがあり、さらに執筆内容の詳細が議論された。
 - (4) 地球観測衛星の課題についての執筆内容の紹介
：デブリ対策を盛り込むこと、および、政府系の衛星の役割と民間の衛星の役割についての意見があり、議論が行われた。

- 4章 地球衛星観測システムの構築における世界の取組
 - リモセン学会に寄稿された内容をたたき台に次回までに資料を共有して議論することとなった。

- 5章 地球衛星観測プログラム構築における日本の役割と取組 について執筆方針の説明があり、議論した。
 - わが国として観測すべきデータについて、ECV の観測を世界で分担する
 - 日本の高い技術力による ECV の精度向上は技術向上につながる
 - 日本の技術優位性は存在するが外国も進展している。日本として必要な技術があれば、開発すべき
 - 新技術開発：高度な技術・部品の宇宙実証により新しいミッションの立ち上げが容易になる。NASA や ESA において小型衛星開発が進んでいる。民間でも、光学観測 PlanetLabs Dove,合成開口レーダ ICEYE、GPS 掩蔽 Spire LEMUR
 - ECV については、早坂委員が受けもつ
 - 「日本の役割」という文脈では、日本の科学・技術的優位性については議論すべき。それらについて最近(世界の)小型衛星で類似の衛星が出つつあり、日本として小型衛星開発に取り組むことについても議論すべき。

4. 次回の予定について

- 今回は、5章まで議論を行った。次回は6章から8章と提言を議論する。
- 次回までに資料を共有して、議論を進めていただきたいことを確認した。
- 次回の会合は12月で日程調整させていただくことを確認した。